

推薦のことは

薬剤師の業務にはさまざまな計算が登場する。実際その計算は、特に調剤実務では四則演算ができれば対応できるようなものばかりで、計算自体が難しいという話ではない。しかし、この計算は薬剤師にとって「当たり前」のようで決して簡単ではない側面をもっている。それは、患者さんへの投与に直結するものが少なくないからである。この感覚は、特に現場に出る前の薬学生にとっては認識しにくいかもしれないが、本書に登場する計算は、単なる計算ではないのである。

とはいえ、このデジタルの時代である。これらの計算をアシストするような機能をもったシステムは数十年前から現場に投入されており、計算機能を集約したようなアプリもある。そうしたものを駆使する技術も間違いなく重要であり、今後もそれらはさらなる進化をするのだろう。それでも、自分自身で計算ができなければならない状況が現場にはある。実際、災害時やシステムダウン時の調剤、緊急時の対応など枚挙にいとまがない。もし、それら便利なシステムが設定などの都合でエラーがあったとして、それを見つけることができるのも薬剤師である。おそらく今後もこうした計算は、薬剤師にとって「基本中の基本」であり続けるのだろう。

実際には、薬剤師の業務は非常に多岐にわたるため、日々の業務で使用しない、もしくはシステムのアシストが得られる計算は、エビングハウスの忘却曲線の通りに脳の片隅に追いやられていくものも少なくない。特に薬学生や新人薬剤師は、本書の実務に即した形式で出題される「反復」による計算のトレーニングを実施し、計算への苦手意識を解消していただきたい。すでに実務をしている薬剤師であれば、腕試し問題を試し、苦手な計算領域を見つけて取り組むのもよいだろう。そして薬学生であれば実務実習、現場の薬剤師であれば実務でこれらの計算が必要な状況に遭遇した際に本書を再び手に取ることで、その計算の意義や臨床への活用など、深みが増していく部分もあるはずだ。

本書に登場する計算を単なるスキルとしてではなく、患者さんの安全を守るための基盤と捉え、確実に実践できる薬剤師として成長していただきたい。

2025年12月

東京薬科大学 薬学部

川口 崇